

「うわぁ……」

手元の紙を見下ろしながら、僕は小さく息を吐いた。

『再検査が必要です。医療機関を受診してください』

たったそれだけの一文が、ひどく重く感じる。

大学で行われた健康診断。何事もなく終わるはずだったのに、心電図で引っかかってしまった。保健室で渡された紹介状を、何度も折りたたんでは開いてを繰り返す。

(……こういう身体だから、病院は好きじゃないのにな……)

こういう身体。つまりカントボーイである僕からすると、病院はあまり好きではない場所だった。あまり身体が強くない僕はしょっちゅう風邪にかかっ

て、何度も病院に行ったけれど、その度に看護師や事務の人たちから奇異な目で見られるからだ。

でも、高校時代だけは病院に行くのが苦ではなかった。

小さな病院だったけれど、穏やかなおじいちゃん先生と、少しおせっかいな看護師さんに真面目な事務員さん。そして、

『大丈夫だよ』

いつも僕が身体の悩みを愚痴っていたとき、優しく受け止めてくれた研修医の先生。

(先生、もう本当のお医者さんになったのかなぁ…)

高校三年生になったばかりの頃、急な引越しでどうしても高校を変えないといけなかったから、途中であの病院には通えなくなった。だからあの優しかった研修医の仁麿（じんま）先生が、お医者さんに

なれたのかを、僕は知らない。

というより、今はこっちの紙をなんとかしなくては  
はいけない。

(行かなきゃ……だよね)

放置すれば、学校からも連絡が行く。

それが一番面倒だとわかっているから、僕は観念  
して病院へ足を運んだ。

病院独特の、鼻を突く消毒液の匂い。自動ドアを  
くぐった瞬間に押し寄せるその香りに、僕はわずかに目眩がした。

「番号で順番にお呼びしますので、待合室でお待ち  
になってください」

「はい」

受付を済ませ、中待合の硬い椅子に座る。もう診  
察時間ギリギリの時間だったから、待合室には会計  
待ちの人しかいないようだった。

「番号90番の方、第二診察室に向かってください」  
(あ、呼ばれた……)

トントン、静かに第二診察室、と書かれた扉をノックした。

「……失礼、します……」

ゆっくりと開いたドアの先。逆光の中に立つその人の姿を見た瞬間、僕は息を吸うことさえ忘れて、その場に釘付けになった。

そこにいたのは、あの日と変わらない、研修医として出会った仁麿先生の姿。

「あ……っ、仁麿……先生……？」

目が合った瞬間、息が詰まる。

すっと通った輪郭に、穏やかな光を宿した目元。伏せた睫毛が影を落とし、その表情は端正で、すっと高い鼻筋から、形のいい唇までどこにも隙がない。

相変わらず、整いすぎているくらいの顔立ちだった。

「……驚きました。まさか、こんなに早く初帆くんと会えるなんて」

先生は椅子から立ち上がって、ゆっくりと微笑んだ。

「先生……本当に、お久しぶりです」  
(仁麿先生、本当にお医者さんになったんだ……)

再会でできた感動を必死に堪えて問いかけると、先生はデスクを回り込み、僕のすぐ目の前まで歩み寄ってきた。ふわりと、あの頃と同じ清潔な石鹸のような香りと消毒液の匂いが鼻をくすぐる。

「そうですね。……ずっと、ずっと初帆くんを気にかけていたんですよ」

「僕、ずっと先生に会いたかったです！ でも、急

に引っ越しちゃったから、もう二度と会えないかも  
って思ってた……っ」

「そうだったんですね。こうしてお会いできて嬉しい  
ですよ。……まさか、初帆くんから僕のところに  
来てくれるなんて……」

「え、すみません、なんて？」

「いえ。……それより紹介状を見ましたよ。心電図  
に異常、だったね」

「心電図って、僕、どこか悪いんですかね……」

「そんなに怯えないで。心拍の波形は一時的な緊張  
のせいで乱れたり、機械が上手く計測できなかった  
ということもありますから」

「そうなん、ですか……？」

「しっかり測り直せば、はっきりします。もし異常  
があっても僕がしっかり治療までサポートするから、  
大丈夫ですよ」

「仁麿先生……」

その優しい『大丈夫』という言葉に、僕は心の底  
から安堵した。病院への恐怖も、再検査の不安も、

先生の顔を見ているだけでどこかへ消えていく。

「さあ、まずは心音を確認しよう」

仁磨先生はそう言って、隣にあるベッドを優しく指し示した。

「そこに横になってくれますか？」

指差されたベッドの側には、モニターが繋がった複雑そうな測定器が置かれている。

「正確な測定のために、上の服を全部脱いでくださいね」

「えっ！？ ぜ、全部ですか……？」

「はい。心音を正確に拾うためには、素肌に直接端子を当てる必要があるんですよ。しっかり確認できた方が、初帆くんも安心できますよね？」

「そ、そうですね……」

口ではそう返事をしたけれど、内心で僕は戸惑ったままだった。

（それは、検査に必要なことだってわかる。わかるけど、僕はおっぱいだってあるし。それに、高校のときは、おじいちゃん先生が診察したから、仁麿先生の前で裸になったことはないし……）

言わば顔見知りで、しかもこんなに綺麗で頭も良くて。完璧とも言える男の人に、自分の中途半端な身体を見られるのは恥ずかしくて惨めでもあった。

無意識のうちに胸元を隠すように強く腕を組むと、仁麿先生は瞳を少しだけ和らげ、僕を諭すように優しく囁いた。

「大丈夫だよ。これは大切な診察だから。カーテンも閉めたし、ここには僕と初帆くんしかいない。君の身体のことにはよく知っている。大丈夫だから、僕を信じてみてください」

「先生……」

包み込むような仁麿先生の声に、僕は安心感を感じて、震える手でシャツのボタンに指をかけた。ぷちっ、ぷちっと。静かな診察室に、僕の尊厳が剥がれ落ちるような音が響く。

「……あ、……っ……」

（早く脱がなきゃ……。仁麿先生がせっかく僕のために時間を取ってくれてるんだし……。でも、やっぱり先生に、こんな……女の子みたいなおっぱいを見られるなんて。恥ずかしい……っ）

ひとつ外すごとに、診察室の冷たい空気が肌に触れて、熱を持った僕の身体を冷やしていく。でもそれ以上に、仁麿先生の真剣な視線が、僕の指先の迷いをじっと見守っているのがわかって、胸がドキドキとした。

「インナーも、外してくださいね。電極を貼るのに、邪魔になってしまうので」

「……っ、はい……」

僕は消え入りそうな声で返事をする、ゆっくりインナーの裾を持ち上げていく。そして頭から脱ぎとると、柔らかく膨らんだ小さなおっぱいが、仁麿先生の目の前に無防備にさらけ出された。

「……っ、ん、……っ」

（あ、ああ。脱いじゃった。仁麿先生の、目の前で……。おっぱい、丸見えになってる……）

仁麿先生の視線が、僕の喉元から、鎖骨。そして柔らかな膨らみから、熱を持った乳首へとゆっくり、確かめるように動いていく。視線だけで、直接肌を弄られているような、そんな生々しい感覚になって、僕は逃げるように先生の名前を呼んだ。

「あ、あのっ……仁麿先生。……脱ぎ、終わりました……」

「うん、脱いだ服はこっちのカゴに入れておきますからね。それでは、そのままベッドに横になってください」